

## 『芸術の日本』大型図版と沼田荷舟『聚鳥画譜』

中村みのり(学習院大学)

*Le Japon artistique* (以下『芸術の日本』)は、パリの美術商S・ビングによって1888年から1891年にかけて刊行された日本美術に関する月刊誌である。本誌の大きな特徴は、日本美術に関する論文が毎号掲載されていることに加え、10葉の大型図版とその解説が併せて収録されている点にある。従来の研究では論文部分に注目が集まり、図版や図版解説については十分に検討されてこなかった。そこで発表者は大型図版345点の整理を行い、それらを浮世絵などの絵画、陶磁器などの工芸品、染織や陶磁器のための工芸図案の3種に大別した上で、絵画に分類される187図の分析を試み、一定数の図について典拠を明らかにした。その結果、図版解説のなかで作者不明とされ典拠が特定されてこなかった14図が、沼田荷舟の『聚鳥画譜』に基づくことが判明した。

沼田荷舟(1838-1901)は尾張名古屋の絵師である。祖父の沼田月斎は牧墨僊に浮世絵を学び、のちに張月樵や山本梅逸に師事し、荷舟は月斎から絵を学んだ。写生を得意とし、花鳥画を多く手がけ、内国勸業博覧会や1878年パリ万国博覧会への出品、皇居杉戸絵の制作にも携わるなど、当時の画壇において重要な位置を占めていた。しかしその画業にもかかわらず、荷舟の研究は少なく『聚鳥画譜』に関する分析は行われてこなかった。そこで本発表では本作の再評価を試みるとともに、『芸術の日本』で紹介されたことの意義を考察する。

『聚鳥画譜』は天地人の三巻からなる画譜で、約100種の鳥が描かれている。天巻は明治18年(1885)、地巻と人巻は明治23年(1890)に金花堂より刊行された。明治45年(1912)に版權が松山堂に移り同年および大正5年(1916)に再刊、大正5年には題名を変更し分冊した全6巻本も出版された。さらに昭和13年(1938)には松山書房より再度刊行されている。このように版元を移動しながら繰り返し出版され、分冊に伴う改題もなされたことで、多様な読者層に受容され、継続的に流通・利用されたことが示唆される。これは『聚鳥画譜』が単なる画集にとどまらず、近代における花鳥画教材、図案資料、あるいは鑑賞の対象として広く機能していた可能性を示す。

また、『芸術の日本』の掲載に加え、現在大英博物館所蔵の本作が、同誌に論文を寄稿したウィリアム・アンダーソンの旧蔵品であり、本作が欧米に渡っていたことが確認できる。このような欧米での受容は、『芸術の日本』の副題 *Documents d' Art et d' Industrie* (芸術と産業の資料集) が示す性格と深く関係していると考えられる。日本の画譜が工芸図案としての性質を備えていたことは、本誌の芸術と産業の結合という理念に合致する好例であり、その延長として『芸術の日本』の大型図版も画譜的役割を果たしていたことを提示したい。